

福祉新聞平成 23 年 1 月 3 日

< 医行為は国民の期待 >

介護福祉士会大会に 1500 人

「福祉と医療の連携 私たちは何ができて、何ができないのか」をテーマに、日本介護福祉士会（石橋真二会長）の第 17 回全国大会が 12 月 10・11 両日に宮崎市内で開かれ、約 1500 人が参加した。

初日の開会あいさつで石橋会長は、介護福祉士によるたんの吸引や経管栄養などの医行為について「本来ならばそのニーズを埋めるのは看護師などの医療職。しかし、看護師が足りない状況において、隙間のニーズを埋めるよう期待されているのが介護福祉士だ。私たちは国民の期待に応えねばならない」と述べた。

また、2012 年度の診療報酬と介護報酬の同時改定に向けては、今後も人材確保や処遇改善につながるよう職能団体として努力する考えを示した。



あいさつする石橋会長

2 日目のシンポジウムには、石橋会長、黒木茂夫・皇寿園施設長、甲斐節子・敬寿園看護課長、前田薫・宮崎県介護福祉士会長、吉村照代・認知症の人と家族の会宮崎支部代表が登壇した。

施設長の立場から黒木氏は、介護福祉士の医行為について「流れに逆らうのではなく、乗り切っていくというスタンスが重要」と指摘。「安易に経管栄養にさせない技術や経管栄養から経口摂取へ移行させるようにすることなどが、介護福祉士の専門性につながる」との認識を示した。

2009 年度に介護福祉士によるたんの吸引を試行事業で行った甲斐氏は「疾患やリスクマネジメントなどの根拠を正確に理解した上で実施できたかは不安が残る」と感想を

述べた。職員の不安を軽減するため、施設内外での継続した研修や医療的ケアを必要としない取り組みをどう進めるかを課題に挙げた。

同様に前田氏も試行事業を行った際の事例を交えて紹介し、「医行為ができる介護福祉士がいい介護福祉士なのかという疑問がある。確かにできないよりできた方が良いが、我々は生活という視点をまず考えた上で医行為に向き合わなければならない」と述べた。

一方、サービスを受ける側の立場から吉村氏は「介護福祉士は家族とともに利用者を支える専門職であり、一緒に責任を担う体制ができれば安心して医行為ができる。施設内の家族会をもっと充実させ、お互いの立場を理解し合える機会を作ることが重要だ」と語った。